
正義のポケモンハンター

タイムボカン好きとヤッターマン3号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正義のポケモンハンター

【Nコード】

N0559M

【作者名】

タイムボカン好きとヤッターマン3号

【あらすじ】

正義のポケモンハンターハルカは盗まれたポケモンを取り返し虐待されているポケモンを救う……。しかし……。数々の冒険で残酷な人間たちを目の当たりにする……。

プロローグ

この物語は・・・奪われたポケモンを取り返し虐待をされているポケモンを捕獲しポケモンを救うハンター・・・けしてハンターメンバーにもこのことはバレてはならない・・・そしてこの物語は正義のポケモンハンターハルカの冒険や戦い・・・すべての始まりを象徴する・・・残酷な人間を目の当たりする・・・

- ・ 物語である

手持ち

ミロカロス

ゴウカザル

サーナイト

ジュゴン

トゲキッス

ボーマンダ

ハルカ 16歳

ボーマンダに乗った少女・・・ウワサの正義のポケモンハンター・・・

・ハルカである今夜も依頼が届き・・・撮り返してほしいポケモンを捕獲するのだ・・・

ハルカ「こんにちは・・・」

男性「おっ・・・お前は誰だ」

ハルカ「アナタのシードラ・・・いただきに来ました・・・ジュゴン」

男性「ポケモンハンターこのシードラはわたさんツラフレシア花びらの舞い」

相性で来たわね・・・でも・・・こっちにだって水と氷タイプの持つジュゴンなもの・・・ここは吹雪で一掃して降伏してもらおう・・・

ハルカ「吹雪」

すると花びらは凍りつきラフレシアに命中した

男性「何故だッ」

ハルカ「フフフフッ」

男性「何故私のシードラを狙う!? シードラなんかたくさんいるぞ」

ハルカ「アナタのではないとダメなの・・・」

男性「な・・・何」

助けてあげるよ……シードラ

すると川辺にいたシードラを見つけると一瞬の内に石化させた……
・石化させた理由……それは他人のポケモンでもボールにはまる
ようにするためだ

ハルカ「ハアィスーパーボール」

カーリー「ンキュウインキュウイン……カチン」

ハルカ「ゲットよ……さてと……もうアナタはもう用済み
だわ……ポーマンダ帰るわよ」

そっとうと空へ飛び立った……

第1話 中間テスト

ミカ「ハルカ・・・中間テスト面倒だね」

ハルカ「そうね・・・中間テストって・・・学校でもあるまいし・・・」

ハンターにもクラスがあつて1位がAクラス10人で・・・誰もがあかごれる最高のクラス2位がBクラス32人そしてCクラスが20人その下がDクラスが56人・・・最低はEクラス153人もいる・・・アタシはBクラス
ちなみに中間テストの内容はJと戦い戦い方を試験する

ユウ「ハルカ順番もうすぐだせ早くスタンバイしろよな」

ハルカ「もうわかつてるよもう」

ハアとため息をついて歩いた

ハルカ「後でねミカ」

ミカ「うん」

ユウ「J様……いくよッレントラー」

J「ボーマンダ」

すると先制でレントラーが凍りの牙を仕掛けた

J「……火炎放射」

炎が舞い上がりレントラーを襲った

ユウ「フツ……まともに受けたけど……コイツは充電したんだ……するとこれが倍以上の威力が増す……放電」

すると部屋中に電撃が放たれボーマンダはまともに受けた

ユウ「まだまだッ……スパーク」

勢いに乗った……ダメージを与えそろそろボーマンダは限界……
……と思われた

J「地震」

すると大きく地面が揺れる電気タイプのレントラーには効果抜群……
……戦闘不能になった……

ユウ「ぐっ……負けた……さすがJ様……あり

がとうレントラー」

そういつつも顔を赤くして悔しそうにしていた……今回は勝ちを確信していたユウは悔しさで前が見えなくなった……

ハルカ「ユウどうだった？」

ユウ「やっぱり」様には合わない……強いよ」

ハルカ「そう……」

中間テストの点数が悪かったら成績に響く……成績が悪いと次のクラスには上がれないため悔しさは倍増する……クラスが上がらないと給料が少ない上ハンターとして動く事もできないことが多い……雑用だけをしてハンターをやめた人もいる

ハルカは気を引き締め緊張の面持ちでドアを叩いた

ハルカ「ハルカです」

ボス「入りなさい」

」「……」

するととてもヒヤリとした緊張感に包まれた……

ハルカ「……」様……」

「ドラピオン」

ハルカ「ボーマンダ」

「ドラピオン氷の牙」

やっぱり……相性のよさで来たわね……でも本気でかからな
いと……負ける……よしっ

ハルカ「火炎放射」

ゴオオオオオッ

ドラピオンが焼き尽くされた……しかし毒針を放たれた

ハルカ「毒を負った……くっ……」

「ヘドロ爆弾」

ドオオオオン

少し辛そうにするボーマンダを見た

どうやら……ここは……一気に決めるしかない……ボ
ーマンダの最強の技……これを受けて立ち上がったポケモンはい
ない……ただ……うまく決まるかどうか……

そう思っているとクロスポイズンを食らった……威嚇である程

度ダメージを防いでいたがそろそろマズイ

ハルカ「流星群」

ドンドオオオオオン

上から隕石が降り注ぎドラピオンに命中・・・

ハルカ「決まったか？・・・」

煙がやむ・・・その時戦闘不能の・・・ドラピオンがいた

」「・・・・・・・・」

声もかけずボールに戻す

ボス「やるな・・・ハルカ」

ハルカ「ありがとうございました」

ミカ「勝ったの？」

ハルカ「うん」

ユウ「すっげえー」

ハルカ「アタシのボーマンダは負けないわ」

ちなみにボーマンダはハンター達の愛用のポケモンで8割も使われる優秀な1匹・・・ただこのポケモンはJ様が使ったのがブームのきっかけ

ユウ「確かJ様の手持ちで1番強いドラピオンだよな」

ハルカ「フフフツだったらJ様より強いのよ」

そう言うと依頼が来たと連絡が入った・・・

ハルカ「任務だからじゃあね」

そしてコツコツコツと足音を立てて消えていく

ユウ「おっとオレは新しい仲間を鍛えないと・・・珍しい1匹なんだよね」

ボールを見た・・・震えるボール・・・中は怯えるポケモンがいるのだろう・・・

ハルカ「確か・・・ここら辺に奪われたリーシャンが・・・色違いだから狙われたらしいけど・・・」

そういうとそこにいたのはユウだった・・・

ハルカ「そんなッ……」

ユウ「ッ……誰だ」

ハルカ「……」

顔をマスクで隠していたのが幸運だった

ハルカ「アナタのリーションはいいだく」

ユウ「させるかレントラーッ」

少しショックだったが目つきが変わり

ハルカ「いけっゴウカザルインファイト」

すると猛スピードで殴り一撃で静めた

ユウ「ああっ……まだまだッ……リーション……」

弱いと思ったのか自信がなさそうに言う

ハルカ「……」

すると石化ビーム（レーザー）を使い石化させた

ユウ「しまったッ」

ハルカ「モンスターボール」

カーンキュウインキュウイン・・・カチン

ユウ「あああッ」

ハルカ「・・・・・・・・いくわよボーマンド」

空へ飛び立つ・・・

ハルカ「どうして・・・・・・・・」

理解してはいたがショックだった・・・

・・・・・・・・当たり前よね・・・ハンターだもの・・・・・・・・

気持ちを抑えハンターアジトに戻った

第2話 旅へ

ハルカは荷物をまとめた・・・今回の依頼はここからかなり遠い場所への依頼・・・回復用具もたくさん準備し旅の準備は万全・・・

ハルカ「・・・さてと行こうボーマンダ」

森へと入った・・・その時

ドオン

ハルカ「!？」

な・・・何・・・今の・・・

ケン「おーとお子供がくる所じゃねえよ」

とはいいつつも同じ年ぐらいだった

ハルカ「年齢は？」

ケン「14歳だぜ見たかッ」

ハルカ「残念ね16よ」

ケン「なっ……でも実力は高いぜゴルバット」

弱い……こんな奴と戦って意味あるかしら……

ハルカ「ジュゴン吹雪」

風が舞い吹雪が襲い掛かった
ヒュオオオオオオツ

冷機は森の木を凍りつかせた

ケン「くっ……怪しい光」

しかし激しい吹雪が光を妨げる

ケン「ならば……超音波」

と同時に進化した

ハルカ「超音波か……まあ……いいけど……」

ケンは空を見上げた

ケン「すっげえ……冷やされてるせいか綺麗なオーロラが見える……」

するとケンは凍りつき寒くなる

ケン「ヒィ寒う……」

ハルカは攻撃の手を止めた・・・

ハルカ「行くわよジユゴン」

ボールに戻し先に進んだ

ケン「く・・・先に進まないほうが身のためだぜ」

その言葉がどこまでも響く・・・少し緊張感があった・・・しかし真っ直ぐ前を向くと歩き出した

さっきの少年・・・なんなの？・・・でも今は・・・進まない
と・・・

するとRとかかれた研究所・・・どうやら昔解散したロケット団の
研究所らしい

ハルカ「・・・」

少し入ってみた・・・すると・・・緑の液体にタマゴやポケモン
が入っていた・・・

ハルカ「うぐ……」

気持ち悪い……

残酷で……閉じ込められていた……

???「アナタは何にし来たんですか」

ハルカ「誰ッ」

???「腕の機械……ハンターですか……私のポケモンの情報がもれた上ケンがここを通した……ということか……」

ハルカ「このポケモン達をどうしようっていうの!？」

???「昔……ロケット団がおこなった生体実験を私が続行したのです……苦しむポケモンも魅力的だね」

ハルカ「なっ……」

ヒドイ……ポケモンが苦しむ姿が魅力的なんて……許せない……絶対……

???「私と戦うのは力がそなわってから……」

そう言うところがったみみと紫の体の人のようなものがハルカを捕まえた

ハルカ「な……何する気!？」

???「カプセルへ案内を・・・」

ハルカ「いやああああああああっ！！！！！！」

めいいつぱいの悲鳴をあげた

そのまま飲み込まれてしまった・・・

???「さて・・・どうしましょう・・・」

目覚めたハルカ

ハルカ「うう・・・」

特に何もおきていない・・・一体何を・・・

???「アナタの遺伝子をポケモンに組み込みました」

な・・・意味がわからない

???「でも失敗しました・・・遺伝子が合わなかったせいかな1匹」

ポケモンが死にました」

震えるハルカ・・・これまでにない恐怖に襲われた・・・今まで
何度危険にさらされたがこんなのは初めて・・・恐怖に怯えていた・
・

ハルカ「あ・・・ああ・・・」

カプセルの中に苦しそうにするポケモン・・・横には落ち着かない
ポケモン達・・・横たわるポケモン・・・そしてポケモン達の死
がい・・・

ハルカ「アナタは・・・」

???「なだけは教えてあげましょう・・・」

声が届かなくなった・・・極度のショックに襲われていたからだ・

???「フッ」

するとハルカはその場に倒れてしまった・・・

夢の中にはこんな歌が流れた

どうして〜なんで〜傷つけるの〜苦しみから解放して〜

そこには悲しそうな目をしたクレセリアが現われた・・・

クレセリア「お願いです・・・ポケモンを・・・助けてください」

その言葉は響き・・・消えていくクレセリア・・・最後に流れた涙・・・
・・・苦しい・・・というかのように・・・

悪夢を見ずにすんだようだった・・・

ハルカ「う・・・ここは研究所の外！？・・・どうして・・・」

ボールからすべてのポケモンがでて来た

ハルカ「何が・・・起きた・・・の・・・」

第3話 ロケット団との対決（前書き）

ハルカ「ねえ作者さんアタシハンターなんだからハンターらしいこと
としたいんだけど・・・」

作者「町につけばハンターらしいことやるから」

作者「ちなみにロケット団達はポケスペだけど・・・レッド達は登場
しないんでご安心を」

第3話 ロケット団との対決

深い森へ入っていくハルカ・・・中は暗く光は差し込まず不気味な不
陰気のみが漂う・・・

暗いわね・・・この先に町なんかあるの・・・!?

すると不信な声がした

???A「見つけたか!？」

おかしいわね・・・こんな所に人が!?

???B「見つからないッ・・・一体どこにいるんだあいつ等は」

どづいづいと・・・!?

???A「一刻も早く捕獲しボスに届けなといけないのに・・・」

???B「やはり幻とされるだけあって見つからないのか・・・」

???A「よしッもう少し探すぞ」

ハルカ「あやしいわね・・・よしッ追ってみますか」

しばらく森を進んだ

ハルカ「大部進むのね」

????A「誰だお前ッ」

ハルカ「あ……Rのマークまさかロケット団」

したつぱA「バレたか……ゴルバット」

ハルカ「ジュゴン冷凍ビーム」

命中しその場に倒れたゴルバット

したつぱ「使えない道具だな……」

するとポケットから注射器を取り出した……

ハルカ「アンタツ何を……」

したつぱ「フッ」

ポケモンにうつた……その瞬間ゴルバットは進化しクロバットに
してはとても大きくなった

ハルカ「なっ……」

したつぱ「翼でうつ」

ジユゴンは地面に叩きつけられ押さえつけられた

ハルカ「ジユゴン……なんて強さ……」

したつぱ「生体実験の一部でね……」

ハルカ「生体実験……聞いたことがある……ロケット団が西端
実験をおこなったと……しかしそれは少年少女達によって食
止められた……何故ッ」

したつぱ「フッフッフッ」

するとジユゴンが苦しそうにしていた

ハルカ「これは……どくどくの牙!？」

したつぱ「ハハハッよくわかったな……オレ達にはかなわない
……昔のような失敗はしない……」

ハルカ「負けないわよッジユゴン絶対零度」
ガギイイイイン

一瞬で凍結した……に思われたが

したつぱ「ヒューーやるなただコイツは一撃必殺技を受けない
んだよ」

ハルカ「そんなッ……」

するとクロバットの表情が変わり苦しそうになった

ハルカ「一体どうしたっていつの!？」

したつぱ「実験失敗か・・・過去にサイホーンがサイドンに進化する実験をおこなったが・・・弱かった・・・だから強い薬を開発したのだッ」

そんな・・・まさか・・・

ハルカは恐怖した

したつぱ「クロバットは死んだんだ」

ハルカ「そんなッ・・・」

したつぱ「もしこのままクロバットが生きていたら・・・今ごろお前のジユゴンは八つ裂きだ・・・戦闘不能で済んでよかったな・・・」

そういうと走り出し逃げていった

ハルカ「待ちなさいッ・・・」

大部奥へと進んだ気がする・・・でも・・・やっぱり暗い・・・ま

るで闇夜・・・

奥へ進めば進むほど暗くなる

したつぱB「待っていたぞ」

ハルカ「待っていた！？アタシを？」

したつぱ「さてと・・・バンギラス」

ハルカ「バンギラス・・・ならこっちはゴウカザル」

したつぱ「相性が・・・バンギラス破壊光線」

ハルカ「かわして」

よけることはできた・・・しかし

ハルカ「きゃああ・・・危ない・・・フウ・・・でも次ターンは動けない・・・インファイ・・・」

その言葉を放とうとした瞬間

ドオオオオン

ハルカ「どうして！？何故破壊光線が・・・」

したつぱ「やつぱは薬は効くなあ・・・」

まさか・・・そのバンギラスにも・・・許せない・・・

ハルカ「くっ・・・ゴウカザル！！マツハパンチ」
ドガン

ハルカ「かなり効いたはずよ！！岩と悪タイプを持つバンギラスには4倍ダメージ・・・そう160ダメージもあるんだから」

しかし見たところそんなに効いているけではなかった

ハルカ「どうして！？あんなに威力があるのに・・・しかもゴウカザルは優秀なポケモンなのに・・・長く付き合って来た一匹なのに・・・」

したつぱ「そう思うことは無理ないか・・・薬は弱点をなくすんだ」

ハルカ「そんな・・・」

したつぱ「ただポケモンを強化するだけじゃないんだ・・・さあて・・・岩雪崩」

すると大きな岩石がふっってくる

ハルカ「くっ・・・ゴウカザル穴を掘る」

そして地面に逃げ込んだ

したつぱ「くっ・・・」

ドガアアン

したっば「ぐっ……しまった」

ハルカ「ブラストバーン」

ゴドオオオオオン

森が焼き尽くされた

ハルカ「ハアハア……気合パンチ」

ドガアアアアアン

したっば「バンギラス……」

ハルカ「タイプがなくなったからブラストバーンも通常攻撃になつてかなり効いたはずよ？」

したっば「くそう……次あったら……覚えてろッ」

そっとうと逃げ去った

ハルカ「……でもロケット団はなんのために……」

第4話 ポケモン交換と仲間

ハルカは森を抜けると町が広がっていた・・・初めて見る町並みは冷静なハルカをもワクワクさせるもだった・・・

少年「きみここの町に来るの・・・はじめてかい？」

いきなり現われた少年・・・13歳〜16歳と言ったところだろう

少年「この町の習慣で初めて来た人とポケモン交換しない？このラプラスと」

交換か・・・ラプラスはレベルも高いしポーマンダで飛行移動しているとポーマンダだって疲れるかもしれないしラプラスなら長距離の海の移動もいかもしれない・・・何より知らない町で空を飛ばするととんでもないことなるし・・・いいわ

ハルカ「わかったわ交換してもいいわよ」

少年「やったーじゃあポケモン交換室で待ち合わせな」

ハルカ「ええ」

・ 約束の時間まで30分ある・・・ヒマだと思いながら町を歩く・・・

ハルカ「ポケモンセンターだわ・・・」

一瞬ホツとする・・・そして依頼の手紙を見つめた

このポケモンは色違いのニドキング・・・同じポケモンハンターに狙われた・・・

リア「見て見てまたかわいいポケモンゲットしちゃた」

友達「かわいいだけじゃなくて強いポケモンを集めるのが今のブームよ」

この二人・・・おもいつきり16歳の体型をしている・・・ただ話してることは子供っぽい

リア「いいのッこれは私の趣味だもん」

友達「KYねー強くないとあこがれのジムリーダーアカネさん見たいにはなれないわ」

リア「ならポケモン見てから言って！！コラッタちゃんピッピちゃん！！」

友達「ホラッ・・・そんなに強くないじゃない」

リア「……ヒドイッ……私だって……強いよ……
強い……けど……かわいくないよ……」

涙を見せ走り出した

友達「リアッ」

……リアという名前らしい

少年「うわあッ」

リアは顔も上げず……

リア「ごめんなさいッ……」

少年「あっさっきの交換しよーッ」

ハルカ「え……ええ」

しかしハルカは少し気がかりだった……さっきのリアという少女が……

少年「どうした？」

ハルカ「さっきぶつかった少女……かわいいポケモンのことで悩んでるみたいなの」

少年「そうか……でもオレ達には関係ないことッ……交換したら旅にでちゃっ？」

ハルカ「ううん・・・他に色々忙しいから・・・」

少年「そうか・・・」

するといっぱいの交換室についた

ハルカ「人・・・多いわね」

少年「なあ・・・正義のポケモンハンターって知ってるか？」

少し焦っていたハルカ

ハルカ「え・・・ええ」

少年「そいつ・・・かっこいいんだっ・・・奪われたポケモンを取り返す美少女らしいんだっクウーイー会ってみてえ・・・」

ハルカ「そっか・・・」

少年「交換完了じゃあなーッ」

ハルカ「ええ」

ホッとしたハルカはホテルへ向かう・・・

リア「きゃあああッ」

どこまでも響く悲鳴・・・ハルカが向かうと色違いのニドキング・

・
依頼のポケモン・・・

しかしそれ以上に驚いたのは・・・Aクラスの・・・キイナ・・・
勝てない・・・彼女はとてつもなく強い・・・

キイナ「フッフツ・・・この町の珍しいポケモンを渡しな・・・さ
もないとコイツがどうなっても・・・」

リア「いやあああッ」

ハルカも助けようと思うが・・・実力では勝てない・・・挑んだら
身の程知らず・・・キイナに挑んだら・・・命の保証はない・・・
ハンター1冷酷な彼女に挑むのは無謀・・・

リア「助けてえええッ・・・まだ私・・・かわいいポケモンと出
会いたい・・・ボールに入れっぱなしのヨノワルに会いたいッ」

ようやくわかった・・・彼女が発した言葉の理由が・・・「強いけ
ど・・・かわいくないよ・・・」

ハルカは覚悟を決めた・・・あらかじめマスクや石化セット・・・
そして服装もハンターに代わっていたからだ・・・

キイナ「おや・・・お前はハンターか・・・Bクラス・・・いい仲
間よ!!!さてそろそろアンタの命は・・・」

シュン

ニドキングが石化されたそしてボールを投げ・・・捕獲した

キイナ「なっ・・・私に・・・逆らうなんて・・・リザードン」

ハルカ「ミロカロスツハイドロポンプ」

バッシュウウウツ

キイナ「ぐっ・・・エアス・・・」

ハルカ「波乗り」

そういうとキイナごと波に飲み込まれた・・・

リア「強い・・・」

ハルカ「さて・・・人質を解放してもらおうか!!」

リア「ありがとうハンターさん・・・」

ハルカ「フフツ・・・」

リア「いえ・・・ハルカさん」

ハルカ「えっ」

正体がバレた！？・・・そんなはずはない完璧にマスクは・・・

リア「私・・・ポケモンセンターで・・・見たんです・・・バックからはみ出る石化セットが・・・」

ハルカ「しまった・・・アタシとしたことが・・・」

リア「ううん木にぶつかった時・・・はみ出てしまったのよ」

ハルカ「他に誰か見なかった？」

リア「ううん・・・ねえ・・・ハルカさん・・・一緒に旅したいの・・・ハルカさんとなら・・・強くなれる気がするの」

第4話 ポケモン交換と仲間（後書き）

第5話 狙われる真実

リア「次の依頼って？」

ハルカ「確か・・・虐待されていたピチューを助けてあげてください・・・ね」

リア「そうか・・・」

ハルカ「確かにアナタのヨワマルは強いかもしれない・・・けど依頼だけは一緒に連れて行けない・・・アタシはそんな責任もてない・・・」

そうはいつたが・・・ハルカは本当はリアを傷つきたくなかった・・・ハルカは正義という善意がある・・・仲間を傷つきたくないという気持ち・・・そして「正義のハンター」としての意地があった・・・

その日の夜ハルカは依頼の場所へ行った

ここに・・・なんか不陰気が大部違うわね・・・

確かにだった・・・空気があきらかに変・・・にらまれているような感じはした

まさか・・・ロケット団が・・・あとをつけているんじゃない・・・

ハルカ「誰ッラプラスハイドロポンプ」
バシユウウウウッ

ミレン「へえ・・・やるのね・・・」

横にはカメラを持った男・・・これは・・・まさか・・・ババフツチ報道陣!?

ミレン「フフフツわらわ・・・じゃなかったあたしの依頼・・・受けてもらったらしいねえ」

ハルカ「ハア!?!?どういう・・・」

ミレン「簡単なこと・・・依頼を出したのはあたしなんだから・・・お前達やっておしまい・・・じゃなかった・・・マニニューラ!!
悪の波動」

闇にまみれる攻撃をラプラスは食らう

カメラマン「そんなことしてなでミレン姫様・・・じゃなかったミレンさんさつさとあの正義のハンターの正体を暴きましょうよ」

ミレン「そうだったね・・・あんなマスクとつちまいなッ」

ハルカ「ラプラス白い霧」

白い霧で目くらましをした

先にカメラを壊さないと・・・

ハルカ「ラプラスッ冷凍ビーム」

ドガアアアン

カメラマン「わわッ・・・ミレンさあん」

ミレン「くっ・・・マニョーラ泥棒」

ハルカ「ラプラスハイドロポンプ」

バシャアアアン

ハルカ「マニョーラが・・・しまった」

ガッ

マスクが奪われた・・・

うっ・・・顔を隠しながら戦わないと・・・

ミレン「状況がわからない・・・そうだね・・・そんな腕で顔を隠しつづけれかな・・・マニョーラ辻斬り」

ハルカ「ゴウカザル・・・マッハパンチ」

ドオオオオオン

ぶつかり合う技・・・

ミレン「ゴウカザル奪ってきたのね」

ミレン「ハッ・・・そうか・・・さっきぶつかりあったのはマニユーラを倒したかったわけではなく・・・スピードをいかしマスクを奪ったのか・・・相手を倒すことだけに集中していたマニユーラはマスクの注意度が下がったのか・・・くうっ・・・カメラマンッ他にポケモンはないのかーい？」

カメラマン「ミレン姫様・・・もういませんよー廊下にたくさん仕掛けてきたではないですか」

ミレン「わらわが負けてもよいのかあ」

カメラマン「そ・・・そんなことはありませんよ」

完全に混乱してるわ・・・今ね

ハルカ「じゃあもういいんでしょう？じゃあねーっ」

ポーマンダで飛び立つ

ミレン「あああッ・・・お待ちよー!」

カメラマン「ミレン姫様こんなところから飛び降りたら死にますよ」

ミレン「待つんだよッ・・・ピョトつばめ返し」
ポ
ト
ン

ハルカ「わわわッ・・・ハアもう・・・弱いクセして・・・少しお
仕置きしないとわからないみたいだね・・・」

ミレン「お仕置きなら何度もつけたよッ」

ハルカ「ボーマンダ火炎放射」

ゴオオオオオッ

ミレン「あちッあちっあちちち・・・コケマツーツ早くー
水ー」

カメラマン「小生はコケマツではありませんよ」

ミレン「どーでもいいから早くおし」

カメラマン「わがままね・・・ワニノコハイドロポンプ」
バシユウワアアアン

ミレン「ホッ・・・てぬらしすぎなんだよッスカポンタンッ」

カメラマン「ミレンジョ姫様が水をかけると」

ミレン「ひゃあああん」

ハルカ「なんだっだろう・・・あのマヌケども」

リア「ねえハルカさん・・・報道陣がいたってことは誰かから依頼を受けた・・・ということになるわよね」

ハルカ「誰かが・・・配した・・・」

このときからなにか・・・胸騒ぎがあった・・・何か・・・あると・・・彼らは勝てないところかでわかっていた・・・だが・・・いどんだ・・・奴等がもし欲深い所をつけられ・・・多額のお金を渡されたとしたら・・・

第6話 進化への道（前書き）

作者「今回の視点はリアだよ」

リア「やったー」

ハルカ「……まあたまにはいいわ」

第6話 進化への道

私はリアかわいいポケモンを集めてる・・・私のあこがれの人物・・・ハルカさん

リア「ハルカさん今回の依頼って・・・」

ハルカ「依頼じゃなくて・・・洞窟で暴れてるポケモンがいるらしいの・・・そのポケモンを捕らえるのも仕事よ」

依頼だけじゃなくそんなことにも協力するなんて・・・でも行いはレンジャーよね・・・いくら親がハンターでも・・・何故正義のハンターなんかに・・・

そう思い考えつづけているリア

ハルカ「ぼんやりしないで行くわよ」

リア「ああっ・・・ごめんなさい」

少し焦りながらハルカについていった

ハルカ「……フーン……小さな洞窟ね……」

すると大きな岩があった……

ハルカ「アナタの実力を測りたいわ」

リア「え？」

ハルカ「コラツタの力である岩を壊して」

リア「ええええー……私にはできないわ」

ハルカ「強くなりたいんじゃないの？」

リア「わかってる……けど……私こんなに重要なこと……失敗したら」

ハルカはハアとため息をついた

ハルカ「あのねえ……アナタはアタシのサポート役なの！強くなきゃダメなの」

厳しい一面を見せていた……しかし強くなりたいという彼女の気持ちを知ってた上で……

ハルカさんが……こんなに厳しいなんて……

リア「ごめんなさい……コラツタ！！必殺前歯」

少ししか削られていなかった

リア「噛み砕く」

ハルカ「技……いい技があるでしょう」

リア「岩砕き!!」

ガラララッ

岩を壊した

リア「やったー」

ピカアアアッ

ハルカ「あら……進化が始まったのね」

リア「進化って何？」

ハルカ「し……知らないの!？」

かなり驚くハルカさん……そんなに重要なのかな……

ハルカ「姿を変えて強くなるのよ」

リア「姿を……変える？」

パッカーーン

ラッタに進化した

リア「コラツタが・・・こんな姿に・・・」

ハルカ「はっ・・・なんか漫画で・・・あつたような・・・確かこの後・・・泣き始・・・」

リア「そんなあああーーーー」

遅かった・・・

ハルカ「あつちやーーーー・・・」

ハルカ達がついたところ・・・それは

第6話 進化への道（後書き）

次回はハルカの視点

第7話 ロケット団幹部クレイとの対決

グオオオオオオン

ハルカ「リザードン！！いいわこのコをほしがるトレーナーさんがいるかも知れないわ行くわよリア」

ハルカはボールを取り出した相性的にラプラスを出す・・・いつもラプラスを出す理由は守りの高いラプラスで実力を測っている

ハルカ「怒り狂ってるから・・・控えめに・・・水の波動」

水の波動が襲う

ハルカ「よおし」

するとその時ラプラスに10万ボルトが浴びさせられた

リア「な・・・何」

クレイ「・・・邪魔しないでくれるかしら」

そういいながら影しか見えない・・・

ハルカ「アナタは誰」

クレイ「私はクレイ・・・ライボルト雷」

なるほど・・・10万ボルトは奴が起こしたのか・・・ならば・・・

ハルカ「相手するわ！！リア進化したラッタのスピードでリガード
ンを引き付けておいて」

リア「うん」

するとハルカが距離を取った

今は・・・距離を取って相手の動きを見切るのが大事・・・

クレイ「さあ・・・攻撃してらっしゃい」

さ・・・さそってる？自信があるの？それとも作戦・・・？・・・
・いや今は考えてるヒマはない・・・リアがずっとリガードンを引
き付けられるわけない・・・

ハルカ「乗っかってやるわハイドロポンプ」
バッシュウウウッ

激流がライボルトに命中した

しかし・・・クレイは全く焦った様子もなく交代する気もない・・・
やはり作戦か・・・と感ずるハルカ

気をつけなきゃ・・・ね

ハルカ「吹雪」

クレイ「火炎放射」

ぶつかり合うお互いの技

くっ……吹雪が……消えちゃた……やっぱり火炎放射には適
わない……ならば……

ハルカ「ハイドロポンプ」

クレイ「……」

バシユウワアアアン

勝ったわ……

ハルカ「もういいわリア！……リア？」

するとクレイが笑った

バチイイイイン

ハルカ「しまった……時間差で雷を放ってたわね」

クレイ「それだけではないわ」

すると落ち着くりザードン

まさか……クレイの手持ち……？

ハルカ「リア！！リア！！！！」

クレイはクスクス笑った

ハルカ「あ……アナタ知ってるわね」

クレイ「別に……ホラッ返してやるわ」

すると場に倒れるリア

リア「……ア……ハア」

疲れてきつてるようだが外傷はない

ハルカ「待ちなさいッ」

その時バッチのRマークが光った

ロケット団……

そのままリザードンに乗って去っていった

ハルカ「……リア」

リア「平気です……」

ハルカ「とんでもない実力持ち主ね……」

まるで・・・大きな出来事が動き出すかのように見えた

第8話 アジトへ

ハルカ「アタシはアジトに戻るわ」

リア「じゃあ・・・私はどうなるの？」

ハルカ「短い間・・・ありがとう」

その言葉一つですべてがわかる・・・その時リアは引き止めたい衝動にかられていたが・・・こらえた・・・自分の力では・・・引き止めることなんてできない

リアは悲しげの表情でうなづく・・・

そしてハルカはボールからボーマンダを取り出しボーマンダに乗って・・・そして空の彼方へと飛んでいった

ボーマンダに乗るハルカの表情強く・・・真っ直ぐ前を向いていた・・・

これが「運命」なんだよ・・・と感じながら・・・二人は違う方向に向かう・・・しかしリアの目からは涙が流れてきた・・・一方ハルカは真っ直ぐ・・・アジトの方向へとみつめていた・・・

アジトへ戻ったハルカ・・・そしてボスの所へ報告をしにいった

ハルカ「ボス・・・任務は完了しました」

ボス「よくやった・・・お前の功績をたたえAクラスに任命しよう」とするとハルカの様子が変わり笑顔になっていた・・・いくら正義のハンターでも順位を気にする部分もあり実績をあげたい・・・そのつもりである・・・Aクラスなら依頼も届くことも多いだろうなによりいいことをしてお金が手にはいる・・・Aクラスだったら多額だ

ボス「AクラスはいそがしいぞAクラスは私が受けた依頼をかなりやることになるんだからな」

ハルカ「え・・・アタシは前に言いましたよね・・・アタシが引き受けた依頼と・・・」

そう他のは・・・本当のハンターの仕事・・・今ハルカがやっているのは正義のハンターとしての仕事・・・しかしハルカは焦る様子もなかった・・・あやしまれないよう可哀想だがやるしかないんだ・・・

ハルカ「では引き受けます・・・」

ハルカには考えがあつた・・・まず奪ってボスに届け依頼人に渡す・・・そして依頼人から奪い返す・・・そう考えていた

ハルカ「そんなに大変ではなさそうね」

そのな調子で五件目・・・依頼人の元へ行った・・・

ここは・・・前に行った研究室!?

するとロケット団隊員がいた・・・何より驚いたのは・・・いままでの依頼人達であった・・・

そうか・・・Aクラスは情報がもれないよう欲しいポケモンをAクラスに依頼してたのか・・・やっぱりロケット団のポケモンハンターは仲間だったのか・・・

少し後ずさりをした・・・ここはハルカにとってトラウマな場所・・・一度外に出て空気を吸った

ハルカ「迷ってるヒマはない・・・アタシは正義のポケモンハンターなんだから・・・」

しかし入気が起きない・・・

その時・・・現われたのは夢に出て来たクレセリアだった

クレセリア「お願いです……苦しむポケモンを助けてください……」

ハルカ「アナタ……何故……ここに……」

クレセリア「これ以上……犠牲者を出したくないのです……このクレセリアのように」

ハルカ「ぎ……犠牲者!？」

クレセリア「はい……このクレセリアは……天から念で映し出した……幻です……しかし本物のように戦え戦闘不能にもなりません……」

するとクレセリアの事を理解した……クレセリアは珍しいポケモン……実験に使われ失敗して命を落としたのならわかる……クレセリアは他のポケモン達を考える……やさしいポケモンだと……

ハルカ「わかったわ……助ける……今……アタシがやらな
いと……」

ハルカは少しずつ足を踏み入れた……

「???? ミュウを捕獲できたか？」

隊員A「いえ・・・恥ずかしながら・・・」

「???? さすがは幻・・・簡単には見つからないか・・・」

机にあつたコーヒーを飲んだ

「???? さて・・・昨日ハンターからもらつたりオル・・・波動の
実験だ」

その時・・・

ハルカ「ラプラス冷凍ビーム」

ガギイイン

ボールが壊れリオルが逃げ出す

「???? お前・・・あの時の!!」

ハルカ「・・・・・・・・これ以上犠牲になるポケモンをふやさせない
!!」

「???? フツ・・・私に勝てるだけでも?・・・ヘルガー」

ハルカ「ラプラスハイドロポンプ」

「???? オーバーヒート」

ゴオオオオオツ

炎が水を蒸発させた

ハルカ「なんて威力……ハツ」

炎に焼かれるラプラス……かなり苦しそうになっていた

???「強さに驚いていたな……コイツも実験で強くなったのだ」

ハルカ「ツ……なんてこと!!!!……ならば……ゴウカザル!!インファイト」
ドオオオオオオン

???「頼りない一匹だなあ……仕方ない注射だ」

注射を打つがヘルガーはパタリと倒れ……死亡した……

力が強すぎた……としかいいようがなかった

???「そのゴウカザルを倒すにはこの注射だ……だが……やつぱり頼りない道具だよ」

ハルカ「ポ……ポケモンはアンタの道具じゃないのよ!!」

???「ゆけつ!!二番手!!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0559m/>

正義のポケモンハンター

2010年10月8日21時55分発行